

企画展できず 悩む文化施設

新型コロナウイルスの感染拡大を受け、県内の美術館や博物館など文化施設の7割が、企画展への影響は1年以上先にまで及ぶと考えていることが、18日までの静岡新聞社の調査で分かった。来場者の減少をはじめとした運営面の懸念も浮き彫りになった。

県内7割「コロナ 1年超影響」

作品、学芸員移動に制限

変わる
日常
新型コロナ

日程変更など企画展の計画に影響が及ぶ期間についての見通しは「1〜2年」が46%、「2年以上」が24%だと回答した。野美術館「来年3月を踏まえた運営面の懸念は「来場者の減少」(90%)」「企画展への制限」(66%)」「設備投資の増加」(42%)の順だった。

収蔵品の活用 鍵

静岡文化芸術大文化政策学部
高島知佐子准教授
(アートマネジメント)



7割の施設が企画展について来年以降も影響があると答えている。展示作品の貸し借りなどの交渉は開催期間の約2年前から始まるのが通例。感染状況の先行きが見えない中では準備は困難を極めるだろう。世界中で芸術作品が動かせない状況が続いている。展示に当たっては、作品だけを送ればいいというものではなく、専門の設営者の立ち合いが必須。人の移動が自由にできないことも痛い。

有名絵画を集めて多くの集客を誇る「ブロックバスター展」は開きにくくなるだろう。今後は各施設の収蔵品、学芸員や施設スタッフの企画立案能力といった既存のリソースをいかに生かすかが、一層問われることになる。一方で、リアルな芸術文化に触れたいという人々の渴望は強まっている。「経験財」を買う行為としての芸術鑑賞は、コロナ禍以前より価値が高くなっているのではないかと見られる。

自由回答では文化施設の在り方を問う声が目立った。「来場者が多ければいいという評価基準が成立しなくなった」(資生堂アートハウス)。「静かに楽しめる施設として、重要度が増す」(浜松)

今後の企画展の変化を予測してもらったところ、72%が「大規模展が開きにくくなる」、62%が「海外の作品が取り扱にくくなる」、54%が「巡回展を開きにくくなる」と答えた。一方で「オンラインで収蔵品などを紹介する機会が増える」とした施設が68%に上った。

「開催予定だった企画展を2年後に延期」(静岡市美術館)「来館者数の見込める企画展を延期し、収蔵品展にとどめる」(磐田市香りの博物館)など、展示品の確保、学芸員や関係者の移動リスクが足かせになっている。

「開催予定だった企画展を2年後に延期」(静岡市美術館)「来館者数の見込める企画展を延期し、収蔵品展にとどめる」(磐田市香りの博物館)など、展示品の確保、学芸員や関係者の移動リスクが足かせになっている。

市秋野不矩美術館「地元の文化施設への関心の高まりを期待」(ベルナル・ビュフェ美術館)など、役割が強化されるという意見もあった。50施設から回答があった。

読者コンシェルに
新型コロナ特集